

# 有

史以来、ひとは社会的なつながりを維持  
することで生きてきた。大自然の中で生  
き抜くための環境をつくりながら、他者や社会  
との絆を保つことは、人間本来の生存本能とも  
呼べる。しかし、私益を優先し個人主義化した  
現代社会では、公共的な場所やものに対する価  
値観の共有が困難だ。これは人間が生きていく  
上での本来的な豊かさの享受にとつて看過でき  
ない状況である。売れなくなったら終わりとい  
う、経済至上主義、市場原理主義の思想からは、  
この再建は難しいだろう。

目を閉じて考えてみる。自分にとって「大切  
な場所」は何処だろうか。生まれ育った故郷、  
初めて一人暮らしをしたまち、働き始めて仕事  
で訪れた土地、結婚して家族と暮らす家。過ご  
してきた日常の全ての場所にそれぞれ愛着や思  
い入れが浮かんでくる。これらの場所の中にど  
れだけ「公共の場所」への思い入れを抱くこと  
ができるだろうか。

私は土木の景観・デザインを専門とする設計  
事務所を主宰している。道路や橋、河川や公園、  
広場といった公共施設を景観的側面から、その  
場所のあるべき姿として提案することが責務で  
ある。『景観は見た目の話でしよう?』とよく耳  
にする。しかし、私は全ての提案において「公  
共性を再構築すること」を意識している。景観  
の問題を議論することは、表面的な見た目の良  
し悪しだけの話ではなく、公共に対する意識に

## 各 人 各 説

# 今、場所づくりにかける思い

有限会社EAU

崎谷浩一郎

Koichiro Sakitani



ついで考えることと等価だと考えているからだ。  
最近、長崎県五島市で公共駐車場のリニュー  
アル整備のプロジェクトに関わる機会に恵まれ  
た。福江島の堂崎教会を訪れるための乗用車  
一〇台程度の海辺の小さな駐車場だが、事業は  
三〇世帯前後の近隣住民の方々と話し合いをし  
ながら進められた。メイド・イン・五島をコン  
セプトに、整備で使用する材料はできるだけ島  
内産のものを使い、ベンチや案内板に使用した  
タイルは、目の前の海辺で拾った貝殻や椿の葉  
の型押しで模様をつけ、地元の窯元で焼いても  
らった。海沿いには散歩や夕涼みができる場所  
も設け、ただの駐車場整備のほすが、いつしか  
広場とか公園とか呼ばれるようになった。リニ  
ューアルオープンイベントでは、なんと餅撒  
きまで行われたほどだ。私は公共の場所づくり  
には、多くの人が思い入れを持つことができる  
ようなプロセスやそれを生み出す企画力が必要  
だと思う。デザインはそれを実現するきっかけ  
であり、手段でありたい。  
未曾有の大震災被害で多くの人が生きていく  
ための場所を失った。場所の再興は、命や財産  
を守るための定量的な数値だけでは決めること  
はできない。定量化することは貨幣価値に置き  
換えることはできても、人間本来の生存本能に  
関わる意識価値とは別物である。再興するから  
には愛着をもって住み続けることができる場所  
でなければ意味がない。